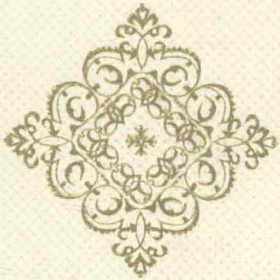

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

3

アベ・プレヴォ

マノン・レスコ　渡辺明正訳

コンスタン

アドルフ　滝田文彦訳

フロマンタン

ドミニック　安藤元雄訳

中央公論社

新集 世界の文学 3

©1969

アベ・プレヴォ
コンスタン
フロマンタン

訳者 渡辺明正
滝田文彦
安藤元雄

昭和44年6月1日初版印刷
昭和44年6月10日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

アベ・プレヴォ　マノン・レスコー　3
コンスタン　アドルフ　169
フロマンタン　ドミニック　255
解説　476
年譜　504

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

マノン・レスコー

『ある貴族の回想』の著者*よりの言葉

わたしは『回想』の中にシュヴァリエ・デ・グリュの冒険の物語を組み入れることもできたが、『回想』とは必然的な関連がないので、この物語を切り離して読む方がいっそう読者は喜ばれるだろう、とわたしは思ったのである。それにこんな長い物語は、わたし自身の身の上話の筋をあまりにも長いあいだ中断することになったであろう。わたしは厳密な作家という資格を自負するつもりはさらさらないが、叙述というものは、それを重苦しくし、煩雑にする枝葉の説明を刈り落としていなくてはならないことを知らぬわけではない。それはホラティウスの教えである。

ただちに言うべきことは、ただちに言え、
多くのことは止めおき、さしあたり省略すべし。**

こんな単純な真理を証明するのに、こんないかめしい権威など必要あるまい。なぜなら良識がこの規則の根源だからである。

もし読者がわたしの生涯の物語の中に何か意にかなったもの、何か興味のあるものを見いだされたとすれば、この続篇にもそれにおとらず満足していただけることを、わたしはあえて約束する。読者はデ・グリュ氏の行状の中に、情熱の力の恐るべき実例を見られるであろう。わたしの描かねばならないのは、幸福であることを拒み、進んで最悪の不幸の中に飛びこんでゆく盲目的な青年である。彼はもっとも輝かしい才能を形づくるあらゆる美質をそなえながら、運命と自然が与えてくれるすべての特権よりも、世を忍ぶ放浪の生活の方を好んで選ぶ。彼は自分の不幸を予見しながら、それを避けようとはせず、不幸が身にしみ、不幸に打ちひしがれていながら、何時でも不幸を終わらせることのできる救済の手がたえずさしのべられているにかかわらず、それにすがろうとしない。要するに、どちらつかずの性格であり、美徳と悪徳の混合であり、善良な気持とよこしまな行ないの果てしない争いである。これがわたしの提供する描写の真意で

* この小説は、アベ・プレヴォがド・ルノンクール侯爵に仮託して一七二八年以来発表してきた『隠遁したある貴族の回想と冒険』の第七巻目として一七三一年に初刊された。

** 原文はラテン語。ローマの詩人ホラティウス（前六五～前八）の『詩論』四三～四四行の引用。

ある。良識ある人たちなら、このような性質の作品を無用のわざとはお考えにはなるまい。そこには、楽しい読書の喜びのほかに、風俗の教化に役立つような事件が少なからず見いだされるであろう。わたしの考えによれば、楽しませながら教えることは、公衆を大いに裨益することになるのである。

道徳の教えについて反省する時、それが尊重されもし、無視されもするのを見て、人はかならず驚かされる。そして、善と完徳を観念としては是認しながら、実行にあたってはそれらから遠ざかる人間の心の気まぐれの理由を人はいぶかしく思う。ある程度才知のある、洗練された人たちが、彼らの会話、あるいは彼らの孤独な瞑想のもっとも普通の主題は何であるかを調べてみる気になったら、それらの主題がほとんどつねに何らかの道徳的考察の上をめぐっていることに容易に気づくだろう。彼らの生涯でもっとも楽しい時というのは、ひとりで、もしくは友人とともに、美徳の魅力や、友情の楽しさや、幸福に到達する方法や、われわれを幸福から遠ざける本然の性質の弱さや、その弱さを矯正する手段について、心を開いて語り合うことに過ごした時である。ホラティウスやボワローはこのような対話を、幸福な生活の姿を構成するもっとも美しい特徴の一つとして示している。*しかるに、どうしてこのような高尚な思弁からあれほど容易に転落し、たちまち凡夫の水準にもどってしまうようなことが起こるのであろうか？　わたしの考え違いでなければ、わたしがこれから持ち出す理由が、観念と行為とのあいだのこの矛盾をはっきりと説明してくれる。その理由とは、道徳の教えというものはすべて漠然とした一般的な原則にすぎないので、細かい素行や行動にそれを個別的に適用するのがきわめてむずかしいということである。一例にあてはめてみよう。生まれのいい人たちは、親切や人情は好ましい美徳だと感じ、好みからそれらを実行する気になっている。ところがいざ実践の時になると、彼らはしばしばためらってしまう。はたして実行の時機であろうか？　実行の手段はどうあるべきか、よくわかっているのだろうか？　対象をまちがってはいないだろうか？　たくさんの障害が水をさす。親切で気前よくありたいとは思っているが、だまされることを恐れ、あまりにやさしく、あまりに思いやりがあるように見えて、弱気な人間と考えられるのを恐れるのである。一言にしていえば、人情や親切という一般的な概念の中にあまりにもぼんやりと含まれているいろいろな義務をやり過ごしてはいまいか、あるいは、じゅうぶん果たしていないのではあるまいか、と恐れるのである。こんなふうにためらっている場合、道理に従って心の傾きを決定できるのは、経験、もしくは実例しかない。ところが

経験は、すべての人に自由に与えられる特権ではない。経験は人が運命によっておかれているさまざまな境遇しだいである。だから美徳の実践において多くの人々に手本として役立ちうるのは実例しか残らない。少なくともそれが名誉を重んじる良識ある人によって書かれている場合、このような作品がきわめて有用でありえるのは、まさしくこの種の読者に対してである。そこに語られている一つ一つの事実が理解の一段階であり、経験の欠を補う一つの教訓であり、一つ一つの事件が、人がそれにのっとってみずからを陶冶することのできる一つの手本である。残っているのはただ、人がおかれている状況に合わせることだけである。作品全体が、楽しく実践におきかえられた一つの道徳論である。

厳格な読者は、わたしがこの齢になって、色恋の物語を書くためにふたたび筆をとるのを見て、おそらくにがにがしく思われることだろう。しかし、わたしが今試みた考察が根拠のあるものなら、それがわたしを弁明してくれるし、もしそれがまちがっているなら、わたしの考え違いだったといって、わたしの言いわけにしよう。

＊　ボワローはフランスの詩人（一六三六～一七一一）。ホラティウスの『諷刺詩』第二巻、第六歌、七二～七六行および、ボワローの『書簡詩』第六、一五五～一五八行あたりを指す。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

第一部

わたしがはじめてシュヴァリエ・デ・グリュに出会った時期にまで読者にさかのぼっていただかねばならない。それはわたしがスペインへ出発するおよそ六ヵ月前だった。わたしはめったに隠遁所*から外に出なかったが、時には娘いとしさに、ついいろいろの小旅行をすることになった。しかしそれもできるだけ短く切り上げるようにしていた。

ある日、ルーアンからの帰りのことだった。ルーアンへは、わたしが娘のために残しておいてやったわたしの母方の祖父からの土地の相続権のことで、娘に頼まれてノルマンディ高等法院へ請願しに出かけたのだった。ふたたび道をエヴルーにとって、最初の晩はそこで泊まり、翌日、五、六里離れたパシー（ノルマンディ街道の宿駅）に着いて昼食をとった。この町にはいると、町じゅうの人たちがざわめき立っているのを見て、わたしは驚いた。彼らは家から飛び出し、むらがってとある安宿の門口に駆けつけていた。宿の前には、二台の幌つきの荷馬車が止まっていた。まだ車につながれたままで、疲れと暑さのために湯気を立てているらしい馬を見ると、この二台の馬車が着いたばかりであることがわかった。しばらく立ち止まって、わたしはこの騒ぎの原因をたずねたが、物見高い野次馬たちからはほとんど何の説明も得られなかった。彼らはわたしの問いにはいっこう頓着せず、ごった返して押し合いながら、相変わらず宿屋の方に向かって進んでいた。負い革をかけ、マスケット銃をかついだ一人の警吏がやっと門口に現われたので、わたしはこちらに来るように手まねきし、この騒ぎの原因を教えてくれるように頼んだ。

「何でもないんですよ」と、警吏が言った。「十二人ばかりの娼婦を同僚といっしょにル・アーヴル・ド・グラース（今日のル・アーヴル）まで連れて行き、そこでアメリカ行きの船に乗り込ませるのです。きれいなのが何人かいるので、どうやらそれがこのおめでたい百姓どもの好奇心をそそっているらしいのです」

もしも一人の老婆のわめき声に足を止められなかったら、わたしはこの説明を聞いて通りすぎてしまったこと

* ルノンクール侯爵が妻の歿後、隠遁していた修道院を指す。やがて侯爵は青年貴族ローズモンの師傅となり、ともにスペインに出発する。

だろう。その老婆は両手を合わせて、あれは野蛮だ、おぞけを催す、哀れな光景だ、と叫びながら、宿屋から出てきた。

「いったいどうしたのかね？」と、わたしは老婆に言った。

「ああ！　旦那様」と、老婆は答えた。

「はいって、ごらんください、あれを見て、胸が張り裂けずにいられましょうか！」

わたしは好奇心に駆られて馬からおり、それを馬丁にあずけた。人垣をかきわけて、やっと中にはいると、なるほどかなり心を打つ光景がわたしの目にはいった。六人ずつ、胴中を鎖でつながれている十二人の娼婦の中に、態度といい、顔つきといい、その身分にはまったくそぐわないので、他の状況でだったら、一流の婦人と取り違えたかもしれないような女が一人いた。その悲しげな顔も、その下着や衣服のよごれもほとんど彼女を醜くしてはいず、その姿はわたしに敬意と憐憫（れんびん）の気持を起こさせた。しかし彼女は見物人たちの目から顔をかくそうとして、鎖のゆるすかぎり、からだをそむけていた。からだをかくそうとするその努力はわざとらしいところがまったくなく、恥じらいの気持からきているように思われた。この不幸な一隊につきそっている六人の護衛兵たちも同じ部屋にいたので、わたしは頭株一人をわきに呼んで、この美しい女の身の上について説明を求めたが、彼はごく一般的な説明しか与えてくれることができなかった。

「わたしたちは警視総監の命令で、あの女をオピタル*から引き出してきたのです」と、彼は言った。「どうやら善行のために、あそこにぶち込まれたのではなさそうですな。みちみち何度もたずねてみたのですが、頑として一言も答えようとしないのです。それでも、仲間の女どもよりは少しましそうなので、とくに手心を加えてやれ、と命令を受けたわけではないのですが、とにかくあの女には多少の考慮をしてやっているのです。あそこに若い男が一人いますが」と、その警吏がつけ加えた。「あの男ならわたしよりもくわしく、あの女の不幸の原因をお教えできるでしょう。あの男はパリから女についてきたのですが、ほとんど一瞬も泣きやまないのです。あの女の兄か恋人かにちがいありません」

わたしはその青年が坐っている部屋の隅の方をふり向いた。彼は深い物思いに沈んでいるように見えた。わたしは今までにこれほど生々しい苦悩の姿を見たことがなかった。ごく質素な身なりをしてはいたが、家柄もよく、教育もある人間であることが一目でわかる。わたしが近づくと、彼は立ち上がった。彼の目や、顔つきや、そして彼のすべての動作の中に、じつに洗練された、じつに品のいい様子を見いだして、わたしはおのずと彼に好感

をおぼえるのを感じた。

「お邪魔して申しわけありませんが」と、彼のそばに坐りながら、わたしは言った。「あの美しい方のことを知りたいというわたしの好奇心を満足させていただけないでしょうか？　お見受けするようなみじめな境遇にふさわしい方とは思えないのですが」

青年は、自分のことを話さないでは、彼女が何者であるか、きかせることはできない、ところが自分はよんどころない理由で人に知られずにいたいのだと、ていねいに答えた。

「しかし、あの下司ども（げす）が知っているくらいのことならお話しできます」と、警吏たちを指しながら彼はつづけた。「それは、わたしがひじょうに激しい情熱であの人を愛し、その情熱のために世の中でもっとも不幸な人間になってしまったということです。あの人を自由の身にするために、わたしはパリであらゆる手段をつくしました。請願、策略、暴力、すべてが無駄でした。たとえあの人が世界の果てまで行かなければならないとしても、わたしはその後を追う決心をしたのです。わたしはあの女といっしょに船に乗り、アメリカへ渡るつもりです。ところが極悪非道にも、あの卑劣なならず者たちは」と、警吏たちのことを言いながら、彼はつけ加えた。「あの人に近づくことを許してくれようとしないのです。わたしはパリから数里離れたところで公然と彼らを襲撃する計画でした。大金を代償に、援助を約束した四人の男を抱き込んでいました。ところが、あの裏切り者どもはわたしにだけ武器を取らせておいて、金を持って逃げてしまったのです。力ずくでは成功しないと悟ると、わたしは武器を捨てました。わたしは報酬を払うことにして、せめて後について行くことを許してくれるように警吏たちに話を持ちかけたのです。金儲け（かねもう）につられて、彼らはそれに同意しました。彼らは恋人に話しかける自由を与えてくれるたびごとに、支払いを要求しました。わずかのあいだにわたしの財布（さいふ）は空（から）になり、一文なしになった今では、わたしが彼女の方へ一歩でも進むと、彼らは無情にもわたしを乱暴に突き返すのです。たった今も、彼らの威嚇にかまわず、わたしが彼女に近づこうとしたので、彼らは無礼にもわたしに銃口をつきつけました。彼らの貪欲を満足させて、歩いてでも道中できるように、わたしは今まで乗ってきた駄馬までここで売り払わなければなりません」

＊　オピタル・ジェネラールとも呼ばれる。当時パリに氾濫していた乞食のために摂政アンヌ・ドートリッシュが設けた貧民救済機関。ここではその施設の一つであるラ・サルペトリエールを指す。これはもと硝石工場だったが、一六五六年には上記のごとく貧民収容所となり、さらに一六八四年以後は、女子の施療院・救護所・感化院であるとともに、女囚、とくに売笑婦の監獄となった。

かなり落ち着いてこの物語をしているように見えたが、語り終えると青年ははらはらと涙を流した。この恋愛事件はまことに世の常ではない、まことにいたましいもののようにわたしには思われた。

「しいて事件の秘密を打ち明けていただかなくても結構ですが」と、わたしは言った。「もし何かお役に立てるものなら、喜んでお役に立ちましょう」

「残念ながら」と、彼は言葉をつづけた。「わたしにはこれっぽっちの希望の光も見えないのです。みずからの運命のきびしさに服さなければなりません。わたしはアメリカに行きます。アメリカでなら、少なくとも愛する女といっしょに自由にいられるでしょう。友人の一人に手紙を書きましたので、その友人がル・アーヴル・ド・グラースへいくらかの救援の金をとどけてくれることでしょう。わたしがいま頭を悩ましているのは、何とかそこにたどりつくことと、あのかわいそうな女に」と、彼は悲しそうに恋人を眺めながら、つけ加えた。「道中、いくらかでも慰めを与えてやりたいということだけなのです」

「それでは」と、わたしは彼に言った。「あなたの悩みを取り除いてさしあげましょう。ここに少しばかりお金がありますが、どうぞこれを受け取ってください。ほかのことでお役に立てなくて残念です」

わたしは護衛兵たちが気づかないように、ルイ金貨（ルイ十三世時代から鋳造された金貨。二十四リーヴル（フラン）にあたる）四枚を彼に与えた。もし護衛兵たちが彼の手にこれだけの金のあることを知ったら、彼らはその恩をいっそう高く売りつけるだろうと考えたからである。さらにわたしは、この恋する青年がル・アーヴルまで恋人と絶えず自由に話して行けるように護衛兵たちと契約を結ぼうという考えさえ起こした。わたしは頭株の男にそばへ来るように合図をし、彼にそのことを申し出た。彼はその図々しさにも似合わず、ばつが悪そうだった。

「女に話しかけるのを拒んだわけじゃないのですが」と、彼は困ったような様子で答えた。「あの男はのべつ女のそばにいたがるのです。それじゃわたしたちの邪魔になります。邪魔をするからには、その代価を払うのはしごく当然のことです」

「それじゃ」と、わたしは言った。「きみたちに邪魔だと感じさせないには、どうすればいいか考えてみようじゃないか」

彼は大胆にもわたしに二ルイを要求した。わたしは即座にそれを与えた。

「しかし、かりそめにもずるいことをしないように気をつけるのだね。そんなまねをすれば、知らせてもらえるように、この若い方にわたしの所書をお渡ししておくか

らね。それにわたしにはきみたちを処罰させるだけの力があることを考えるがいい」

わたしにとってはルイ金貨六枚の出費だった。だが優雅な態度と、この見知らぬ青年がわたしに礼を述べたその激しい感謝ぶりは、彼がひとかどの人間に生まれついていて、わたしの施しに値していることをはっきり納得させてくれたのだった。外に出る前に、わたしは彼の恋人にも二言三言、言葉をかけた。彼女はじつにやさしい、じつに魅力あるしとやかさでわたしに答えたので、わたしは外に出ながら、女というものの理解しがたい性質についていろいろと考えざるをえなかった。

わたしは隠遁所にもどったので、この事件のその後の成り行きはいっこう知らなかった。二年に近い歳月が流れ、わたしはこの事件のことをすっかり忘れてしまっていたが、やがて偶然、その一部始終を残らず知る機会にふたたび恵まれることになった。

わたしは弟子のド・…侯爵を伴って、ロンドンからカレーに着いていた。わたしの記憶に誤りがなければ、わたしたちは「金獅子軒」に泊まった。そしていろいろの理由で、まる一日と次の夜をそこで過ごさなければならなかった。午後、街を歩いていて、わたしはかつてパシーで出会ったのと同じ青年を見かけたように思った。彼はひどくみすぼらしい身なりをしていて、はじめて会った時よりもずっと蒼白かった。彼はこの町に着いたばかりで、古びた旅行鞄をかかえていた。しかしあまりにも美しい顔立ちをしているので容易に見分けがついた。わたしはすぐに彼を思い出した。

「あの青年に声をかけなければならないのですが」と、わたしは侯爵に言った。

青年の方でもわたしだとわかった時の喜びようは筆舌に尽くせぬほど激しかった。

「ああ！　あなたですか」と、彼はわたしの手に接吻しながら叫んだ。「死んでも忘れられない感謝の念をこれでもう一度申し述べることができます」

どこから来たのか、わたしはたずねた。ル・アーヴル・ド・グラースから船で来たのだが、そこにはついさきごろアメリカから帰ってきたばかりだ、と彼は答えた。「お見受けするところ、懐具合もあまりよくなさそうだ」と、わたしは彼に言った。「わたしの泊まっているリオン・ドールへおいでなさい。わたしもすぐに帰りますから」

じじつ、わたしも宿へ引き返した。彼の不運のくわしい話や彼のアメリカ旅行のいきさつを知りたくてたまらなかったからだ。わたしは彼に何くれとなく好意を示し、彼には何一つ不自由させないように宿の者に命じた。彼は身の上話をするようにわたしにせがまれるのを待たな

かった。

「あなたはわたしに対してじつに寛大にふるまってくださいますので、あなたに何かかくし立てでもするようなことがあれば、わたしは卑しむべき恩知らずの行為として気がとがめることでしょう。わたしの不幸や苦しみだけでなく、わたしのふしだらやわたしのもっとも恥ずべき弱点をもお話ししたいと思います。わたしをおとがめになりながらも、きっと憐れんでくださらずにはいられないと思います」

ここでわたしが読者に告げなければならないのは、彼の身の上話を聞いたほとんど直後に、それを筆にしたということであり、したがって、この物語以上に正確で忠実なものはないことを確信されていいということである。この若い恋の冒険者が世にも優雅な趣きで述べたさまざまな反省や感情の叙述にいたるまで、わたしは忠実に伝えたのである。さて彼の話というのは次のとおりだが、わたしは最後まで彼の言葉でないことは一言としてそこに混じえないであろう。

わたしは十七歳で、アミアン*で哲学課程の学業を終えたところでした。P…（ペロンヌ Peronne）と推定されている）の名家の一つであるわたしの両親がわたしをそこに遊学させていたのです。わたしがまことに思慮のある、まことに規則正しい生活を送っていましたので、先生たちは学寮の模範としてわたしを推したものでした。しかしこの讃辞に値するために特別の努力をしたわけではなく、わたしは生まれつきおだやかで、物静かな性質だったのです。わたしは好きで勉強に専念したのであって、悪徳に対して生まれながらに持っている嫌悪のしるしがわたしの美徳として数えられていたのでした。わたしの家柄や、学業の成功や、人好きのする容貌によって、わたしは町のすべての教養ある人たちに知られ、尊敬されていました。満場の賞讃を浴びて公開演習**を終えましたので、列席しておられた司教様が僧職につくようにわたしにおっしゃったくらいでした。司教様の言われるには、両親がわたしを入れるつもりのマルタ騎士団（十字軍時代に作られた宗教的軍事的騎士団。後にマルタ島に本拠をおいたのでこう呼ばれる）にはいるよりも、僧職についた方がきっといっそう出世するだろうとのことでした。両親はすでにわたしに十字章をつけさせ、騎士デ・グリュ（シュヴァリエ）と名乗らせていました。

休暇がやってきたので、わたしは父のもとに帰る準備をしていました。父はすぐにわたしをアカデミー（貴族の子弟が乗馬、剣道などの武芸を習う道場）に入れてくれる約束でした。アミアンを去るにあたってのわたしのただ一つの心残りは、つねに愛情をもって結ばれていた一人の友人をそこに残して行くことでした。彼はわたしよりいくつか年上でした。わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook